



- 体育会名:関西学院大学体育会陸上ホッケー部
- 創部年:1953年(昭和28年)
- 2025年度会員数:46人(4年14人、3年13人、2年9人、1年10人)
  
- 同窓倶楽部名:関西学院大学体育会陸上ホッケー部OBG会
- 同窓倶楽部通称:関西学院大学体育会陸上ホッケー部OBG会
- 設立年:1956年(昭和31年)
- 会員数:403人(男性287人、女性116人)

※物故者除く

近代ホッケーは1886年に英国で生まれた。その後、欧州各国及び英国と関係の深い植民地各国で、特に軍隊や王室、貴族(皇太子や皇妃など)の間で盛んに行われるようになり、徐々に一般に普及していった。英王室のウィリアム王子夫人、キャサリン妃もホッケー経験者で、2012年ロンドン五輪の際には五輪会場で腕前を披露されていた。

日本でも故高円宮殿下が学習院高等科時代にホッケーでインターハイに出場し、晩年も長居球技場(※現キンチョウスタジアム)などでしばしばプレーされていた。そのご縁で、高円宮妃は日本ホッケー協会の名誉会長を務められており、国民スポーツ大会の最終日や日本リーグの表彰式には毎回出席されている。

#### ・創部～1980年

1906(明治39)年にキリスト教布教のため来日していたウィリアム・T・グレー牧師が、慶応義塾の学生にホッケーを教えたのが日本のホッケーのはじまりである。そのおよそ半世紀後、



53年に関学陸上ホッケー部が創部された。創部3年目に当時関西で無敵と言われた関大を倒して、はじめての関西制覇をなしとげている。この快挙・功績により、体育会として正式に承認された。

初代監督は、明大出身の故川島銚先生であった。川島先生の熱意で関学にホッケー部ができたといっても過言ではないほど、創部当初の活動にあたっては非常にご尽力いただいた。特に明大での合同合宿を通じて初の関西制覇をしたこと、創部5年目に全日本選手権にも出場したことが特筆事項としてあげられる。その後、川島先生は大阪星光学院高監督になり、同校を高校日本一に導いている。

70年頃までの関西学生リーグは、関大と天理大がしのぎを削り、関学は優勝こそ2度しかできなかったが、常に2～3位の好位置で戦っていた。インカレの決勝やベスト4まで勝ち進むなど華々しい戦績を残している。60年ローマ五輪、64年東京五輪、68年メキシコ五輪と、男子日本代表が五輪に出ていた頃は、五輪代表候補選手に残った関学の選手やOBが何人かいた。

しかし、70年代に入ってから、スポーツ選抜の中断等の影響で、戦績は徐々に下降の一途をたどり、非常に苦しい時代を迎えた。70年代前半はまだ関西学生リーグ1部に在籍していたが、75年のインカレベスト4、関西学生リーグ2位という戦績を最後に低迷期に入った。

・1980年～2000年

80年代は、部員全員が大学から競技を始める未経験者ばかりという状況で、3部リーグへの降格もあった。たまに1部に上がっても、すぐ2部に降格。そのまま2部から上がれないという状況に徐々になっていった。1980年から2006年に1部昇格するまでの26年間、関西学生リーグは春秋制のため合計52シーズンあったが、3部降格が2～3シーズン、1部昇格は累計でわずかに10シーズン程度。この20年間は、ほぼ2部リーグで過ごした。

この頃の関西学生ホッケーリーグは天理大が破竹の300連勝を突破し、学生スポーツの連勝記録としてたびたびマスコミにもホッケーが取り上げられた。この頃の大学ホッケー界は、古豪である早大、慶大、明大、法大、東農大と関西の雄である天理大、立命館がインカレベスト8以上を毎年独占。さらに90年代には山梨学院大の創部もあって、関学の名前が全国区で出るような機会は全くなくなってしまった。

・2000年～2020年

1990年代からいよいよスポーツ選抜が再開されるようになったが、当初は効果的な選手確保には至らなかった。2000年以降、OB が東日本と西日本を手分けして高校とのルートづくりに着手し、05年以降は安定して選手確保ができるようになり、06年に久しぶりに関西学生1部リーグに昇格した。

その後は順調に戦績をあげ、08年には創部以来初の全日本大学王座決定戦(※1982年第一回開催)に出場。11年にはインカレで35年ぶりのベスト8に。12年には関西学生リーグで39年ぶりの3位、全日本大学王座決定戦とインカレでベスト8と、古豪復活のきざしがようやく見えてきた。

この頃、OB 内でも女子部を作ろうという機運が高まり、10年に三田キャンパスで活動するはじめての体育会となる陸上ホッケー部女子部を創設した。

また10年から男子部が早大との定期交流戦をスタートさせた。11年からは男女合同での早関定期交流戦となり、12年からは男女合同で早関定期交流戦と、慶大との慶関定期交流戦の両方を行うようになった。長年関東と定期的な交流がもてていなかった当部が、早大、慶大といった伝統校との交流戦を行えるまでに発展できたのは、部関係者だけでなく、KGAA 全体で様々な OB 諸兄のご尽力やお力添えがあつてのことなのはもちろんである。25年度現在も、男子部女子部それぞれの意向を確認し、本交流戦は継続している。

男子部の戦績向上に引っ張られる形で女子部も順調に戦績を伸ばし、12年には夏の全日本大学王座決定戦と秋のインカレに初出場。大学王座では初出場でベスト8と言う快挙を成し遂げた。13年には関西学生春季リーグで初の3位入賞、全日本大学王座決定戦とインカレの両方でベスト8に入るなど、着実な成長を続けている。

これらの強化活動が実を結び、男子部は16年の関西学生春季リーグで、天理大に53年ぶりに2-1で勝利した。これは大きな特筆事項として挙げられる。

また、三田キャンパスにグラウンドができた16年頃から、特に若い OBOG の交流を活性化させる目的で、シーズン初めの毎年2月に OBOG 戦と懇親会をスタートさせた。現在もこの事業は順調に継続しており、若い OBOG から年配・古参の OB まで、幅広い世代が現役部員と交

流する非常に良い機会となっている。



・2020年～

世界的に猛威をふるった19年から22年のコロナ禍は、上ヶ原と三田の2つのキャンパスで活動を行う当部にも大きな影響があった。全体練習も制限され、全体的に活動は停滞した。

その後の立て直しは、25年度現在も最中であると言える。

その立て直しの過程で、男子部は23年のインカレでベスト8進出、女子部は24年の関西学生秋季リーグで、天理大にはじめて3-0で勝利し、その後のインカレでベスト8進出を果たしていることは、今後に向けての明るい話題であり、特に女子部が天理大に完勝したことは特筆事項に値するだろう。

体育会に関わる大学の大きな組織変更となったKGADについても、女子部が22年度に加盟、男子部も25年度に加盟と、当部は男女とも新しいステージに入りつつあると言える。

男女とも、かねてからの悲願である全日本ベスト4入りと、全日本選手権出場(※社会人・実業団4チーム、学生4チームの8チームのみ出場できる)を目指し、OBOGと現役が一体となり今後も努力を続けていく所存である。

陸上ホッケー一部史 宮林 聰光 (H2年 商学部)

